彼岸の話

岡野他家夫

蒟蒻も 櫻も貰ふ 彼岸かな

今日ひがん 菩提の種を まく日かな

「暑さ寒さも彼岸まで」といふが、今、こゝに手近な古書などに見える文獻を主として、いさゝかこの彼岸といふ事に就いて書きしるしてみやうと思ふ。

彼岸といふのは、もと梵語 (Paramita)——波羅密多からきた事で、佛語「到彼岸」即ち諸佛の地——涅槃の境界をいふのである。「翻譯名義集」に——波羅密多諸經論中多翻到彼岸、生死爲此岸、涅槃爲彼岸、煩惱爲中流、菩薩以無相知惠、乘禪定舟航、從生死此岸、故知理定以明波羅密。——とあり、なほ「心經注」や「華嚴經」などに據つてその本義を闡明することができる。天竺では春秋の二分は、日正東に出でて正西に没するが故、これを時正といふこと、又唐土にても、1年を2季に分ちて春秋と名づくることは「左傳」などの書に就て見るのである。

我國では無論これを曆書に書加へて季節の名目として、春分、秋分の日を中日とし、その前後各3日、合せて7日間を彼岸と稱するのは周知のことであるが、それがいつの頃から始まつたか、「曆林問答集」はじめ、これまでの書に就いても據るべき確證のないことは天野信景も「鹽尻」に述べてゐるところである。しかし古人の書を披くと、“けふ出づる春の半の朝日こそまさしき西の方はさすらめ——この歌彼岸の中日をよめるなり、昔時正爲日相觀、得成佛道。といへり、餘の時は日の巡に偏あり、彼岸は四時のうちに東より出て直に西へ入る節なり、されば人の心も正にして日に隨つて西方を念すといふ心なるべし、又西方を佛土といふも物の極まりおさまる事四方のうちに西なればなり、不動無疑の儀を示すなり。——夜ひるのひとしき秋になりにけり春の半を今そと思へば——この歌は秋の彼岸なり、餘の時は晝夜に不同あり彼岸は晝50刻夜50刻なり。「彼岸經」にも、晝夜齊等比兩岸、左右均等。云々とあり、1年を四季に分ても誠は有二季、夏は春の餘、冬は秋の餘なり、夏は長けれども春の日永しといひ、冬の日短けれども秋の日短しといふ”——などゝ見えて、主としてこ

れを時節の名稱として考へてきたのである。

我國で、彼岸に僧家が彼岸會を修する事は古來の慣習となつてゐる。唐土でも、社日といつて春秋に二度土の神を祭る行事がある。春は農事の良好ならんことを祈り、秋はその恩徳を報謝する爲にであらう。が我國で解釋してゐる彼岸あるひは彼岸會といふ事は、天竺にも唐土にも無かつたといふ事は古來既に貝原好古や村瀬栲亭も説破してゐるのである。

この彼岸會の起つたのはいつの時代かとたづねると「日本後紀」延暦25年2月の宮符(太政官ヨリ下セル公文)に記されてある——諸國國分寺の僧をして、春秋二仲月、別七日天皇のために金剛般若經を轉讀せしめた——云々の事をもつてその起源なりとする「鹽尻」の著者の説がまづ今のところ信すべきものと思はれる。彼はその著に——いふ春秋二仲一七日佛事、蓋和俗彼岸會權輿歟、讀金剛般若經而起乎、然延暦二十五年春分中日也、彼岸會の始め也と見えたり。この説正しく僧徒などか附會の説とは懸隔せり——云々と。

然しいづれにせよ、彼岸は1年四季の中で、もつともよき時節であつて、この幾日かをトして釋家は、施餓鬼その他の勤行を修し、俗間では、牡丹餅、團子などを造り佛に供へ、又近隣親戚などへ贈答するに至つた慣例はあながち排すべき事でもなからう。「大智度論」にも——彼岸一日の善は餘の百日の善にまさる——とすら説述されてあるほどだから。

彼岸といふ一つの事に就いてもまだまだ古來種々雜多の記述文獻もあるであらう。あわたしい我々現代人は一部の學者、好事家を別とした——日常口の端にいひ古してゐる——小瑣事に關しても、その事物の起源、由來等には迂かつな場合がすくなくない。それで大方好事家の温知のしるべにもとこゝに、彼岸に關する事柄の見える書物の名の一部を、自分の覚え書から抜き書しておかうと思ふ。

法華經科注序品——因陀羅網——眞俗佛事編——簞籃——壺囊抄——長曆萬考——河海抄——夫木抄——謠曲拾葉集——合類節用集——年中故事要言——年中恒例記——年山紀聞——和漢三才圖會——日本才時記——本朝世事綺談——年中風俗考——三餘隨筆——青栗園隨筆——榊巷談苑——白河燕談——夢之代——隨意錄——世事百談——等。